

四 東京へ納材 富岡八幡宮

昭和二年頃、松井角平さんから呼出しがあった。今般、東京深川で俗称深川八幡宮(富岡八幡神社)の再建建立を請負ったから「用材担当を是非引き受ける」と御達しだったそうだ。

設計者 伊藤忠太博士

構造 台湾檜 総木造作り

工事 着工 昭和二年五月頃

竣工 昭和五年八月頃

伊藤博士と言う人は、当時伽藍建築界の設計では、日本一の定評のある大先生で、明治神宮・靖国神社等関東大震災後の国家的な有名な神社・仏閣は殆んど先生の設計だそうであった。父は早速上京して伊藤先生の事務所を訪れたのである。先生は一見、越中田舎の材木屋では、果して用材の納入が出来るのかと不安に思ったらしい。先生自ら、明治神宮・靖国神社等を御案内頂き、社寺建築の講義を承ったと、父が言って居た。父は腹の中では「今更と」思っ居たが、神妙に聞いて居たそうである。帰途深川八幡宮社務所に立ち寄り、現場を見分したそうである。処が大変である。日本一の木場である深川の真中に出来る、吾々の八幡様の用材を、越中富山の田舎の材木屋が納材するとは怪しからん。用材は台檜だから、「台檜の原木

を不売すると言う」申し合わせを長谷川氏鈴木氏(?)辺りが中心になって、協議して居たらしい。

「父は長谷川・鈴木云々と言っ居たが」当時では、私は未だ学校だったので、良く飲み込め無かったが、今から考えると、長谷川氏は、多分長谷川萬治氏か、長谷川鏡治氏(鈴木氏は解らない)辺りが想像される。何れにせよ、深川へ行くと、富山では想像も出来無い、大きな貯木場及び立派な店舗が軒を並べて居るので、一寸まごついたらしい。色々と交渉したが埒が開かないので、先づ引き揚げ、松井さんに報告に協議したらしい。取り敢えず、作業小屋、数棟及飯場だけは、建てる事に、社務所側と了解を得たらしい。度胸のある父は、そんな事で驚く様な人では無い。早速大阪に飛び、大台組(?)に行ったらしい。当時、台湾檜原木は東京・大阪にしか入荷せず、東京は長谷川・鈴木一派、大阪は大台組一派が、台湾総督府から荷受けして居たそうである。利に聡い大阪勢は、事の次第を聞き、応援するから、「一矢報いよ」との事だったそうである。数量何石位だったか、不明で



あるが、機帆船で一隻早速深川へ廻送したらしい。木挽きの手勢(私の店は、新潟県の中村力蔵グループ及び小池勉治グループを工事の大きさに依り増減して、常時雇っ居た)及大工の一部其の他関係者で、一団を編成して深川へ、松井角平配下の下方の第一陣として乗り込んだ。「職人気質及び縄張り意識の特に強い下町子達、黙って居る筈が無い。父は別に伝手を求めて、下町一帯を支配して居る、大親分にも裏口から了解は得て居たらしい。血の雨が降る寸前迄揉ん

だとの事であったが、漸く妥協点を見出して一応結着したらしい。早速造材を開始した。私は社会人になってから当時私の店に勤務して居た甥の幸チャン辺りが、向う鉢巻きして、手振り、足振りして当時の模様を何回となく話して居た。父の話では樹種は台檜(針葉樹)だから、樺材(闊葉樹)に比較して問題にならない程、木取りが易いとの事であった。軸材(丸柱用・虹梁等)から造材を始めた。丸太を横に伏せた俣、双方から、長手

前挽きで、手挽きするのである。父の造材のコツは、丸太を背板一枚挽けば必ず木表へ張りが出る。張りの出た俣を、二枚目を手挽くと必ず元へ戻る。その張りを目算して、先づ一枚目の背板を挽くのである。墨壺の糸を、湾曲に着色させるのが一つの技術である。即ち曲げ挽きの墨を打つ事が技術である。口では簡単だが、実際は相当に熟練しないと難かしい。即ち出来上がったものは、胴張りした角材が出来る。それを一度に真直に挽くと再び曲るから、先づ木裏を削り、次に木表をと、

木の狂いを殺し乍ら、数回繰り返す事により、将来も狂わない、無理の無い自然の姿の真直な用材が得られるのである。樺材は特に、その曲りが甚しいからと言って、余り多く無駄をすると、歩留りが悪くなる。其等辺りの目算が、技術と経験と云う事になる。樺からすると檜は柔かいから、大きな曲りが張り出る事は少ないと言う、父の見解である。今日になれば私もその理屈はよく理解出来る。造材現場を、伊藤博士自ら視察にお出でになったそうである。造材の仕振りを御覧になり亦出来上っ

て居る製材品を下検査され、全部合格。今後はお前に全面委せるから努力せよと、有難いお言葉を頂いて、父も漸く安堵したらしい。松井角平及其の傘下の諸方は、越中の田舎者でも、斯業にかけては決して田舎者で無い。工事をやり抜く実力は充分に在ると云う評判が、次々に伝わり、何時しか附近民(主に木場の材木屋連)を厚意的に変わり、第二回目の台檜原木購入は、むしろ先方側から折れて、買ってくれと言う事になり円満解決。以後順調に工事が進捗したそのである。父は延日数一ヶ年位深川に居た。祖父は東京には行かず、富山で留守隊長を努めて居た。こんな事があった、お蔭で、昭和六年頃から始まる築地本願寺工事は何んの中傷も入らず、正常な納材が出来たとの事である。

父は深川八幡宮の工事を顧りみて「東京商人と、大阪商人とは全く異なる。商売は決して感情や小理屈で行うものではない。父が昔日露戦争に従軍した時、乃木大将の有名な言葉「熟慮断行」と訓があった。よく考えて、機を逃さない様、信念を持って、実行に突進すれば、自ら通ずるものである」と社会人になった私に度々述べ居る。その深川八幡宮も戦災で全部焼失し、戦後鉄筋コンクリート造りの新しい八幡さんが、昭和三十年頃竣工したのである。